

## 命の大切さを学ぶ教室

東奥学園高等学校 二年

首藤 紗和 (すどう さわ)

私には小学生の弟がいます。数年前、幼い弟がこたつのコンセントを口の中に入れて誤って食べてしまい、救急車で運ばれたことがあります。脳に電流が流れ、死んでいる可能性もあったと言われました。弟が訳もわからずに大泣きをして、母と救急車で運ばれた時、私は本当に弟が死んでしまうのではないかと感じたことのない大きな不安におそわれました。べたっとした汗が体中から出てきて呼吸が浅くなる感覚がありました。今でもあの情景が頭に思い浮かびます。あの時から、弟はコンセントが怖いと言って、避けるようになりました。

「命の大切さを学ぶ教室」を受けて、私は命の重さを改めて感じました。運動会や七五三、発表会の写真を見て、尚己くんが純粋な子供であったことが伝わりました。いつもと同じような朝であったと思います。事故にあった尚己くんの姿を静かに話す田代祐子さんが当時どのような気持ちだったのかを想像すると私は胸が締め付けられます。電気ショックによって、尚己くんの小さい身体が大きく跳ねあがったこと、口や鼻から血が流れ出ていたこと、数十年前の出来事であるにも関わらず、空気は重くこの間起きた事件のような緊張感がありました。スピードを出し、尚己くんをひいてもブレーキをかけることすらしなかった加害者を恨まなかった日はないと思います。加害者だけでなく、日本の法律や理解のない人からの言葉が被害者家族をさらに追い込むこと、私はその事実衝撃を受けました。目の前で弟がひかれる姿を見て、大人でも受け止めることのできないことを尚己くんの兄は、受け止めなければならない状況に迫られたのだと思います。田代祐子さんは講義中、私たちに突然「目を閉じて考えてみてほしい」と言いました。そして、家族や友達、恋人、大切な人のことを考えてほしいと言われました。私は顔が熱くなる感覚がしました。どのような人でも、誰かに慕われて大切にされていることがわかりました。生命のメッセージ展のお話をしていただいた時、弱い者として十代から二十代の人達が理不尽に命を奪われていること、心のない言葉に苦しみ、自ら命を絶つ人がいることが、私の思うよりも多かったことを知りました。命を奪われていい人間なんて一人もいないことを学びました。

田代祐子さんの話を聞き、誰しも人の命を奪う可能性があると同時に奪われる可能性もあるということを考えました。私は通学手段として自転車を使用していますが、曲がり角やアルバイト終わりの暗い道はスピードを落として運転しています。車にひかれたいためでもあり、人をひかないためです。私は他者の手によってこれからの未来を奪われたくないです。私が他者の未来を奪うようなこともしたくありません。また、言葉によって人を傷つけ、自死を選ぶ人が少しでも減ることを祈っています。そのためにも私はこれから、普段の言葉遣いや接し方を改めようと思いました。一人一人のやさしさや思いやりが、誰かの命を救って、誰かの行動を引きとめると思います。

少しのやさしさに世界は変わって見え方が変わります。命は一つしかないこと、私は常に胸に刻みながら生きていきます。